陸のユートピア，海賊小説，ムラート[1)]
――小笠原博毅氏の報告から導かれて――

久野量一

陸のユートピア

小笠原博毅さんの「『パイレーツ・モダニティ』, あるいは輪廻するヒドラの肉体について」(『現代思想』2011 年 7 月号）を読んでいると心が沸き立ってくる。海賊という存在，その生活の過酷や困難とともに，彼らが海上に作り上げるユートピア的空間があざやかな筆致で論じられていくとき，海賊なるものへのロマンチックな憧憬が否応なしによみがえるのだ。「黒ひげ危機一髪」から『宝島』，そして『パイレーツ・オブ・カリビアン』のジャック・スパロウまでをつらぬいている海賊ライフの自由と愉快。そう言えば自分にも海賊にまつわるそんな記憶があったのだと思い出し，日常からの脱出というひそかな願望を刺激されたりもした。

とはいえ，関心の第一は，どんな人が海賊になり，海賊のユートピアはどういうものだったのかということだ。小笠原さんはこう書いている。

> 「それ［海賊］は囚人，淫売婦，負債者，浮浪者，逃亡奴隷及び奉公人，政治犯，当の宗教的ラディカル，革新思想を持つ兵士たちであり，出身民族もイギリス，フランス，スカンディナヴィアから，カリブの原住インディオやアフリカ人も加わっていた。」(『現代思想』，2011 年 7 月号，65 ページ）

> 「十八世紀中ごろ，フランス人のキャプテン・ミソンを中心とした（元）海賊たちとその家族は，様々な意味での背教者の集まりであり，既存の王権，司法，部族権力，初期資本主義的生産関係の外部にあり，独自の共和主義的原理によって生活を営む「意図的な共同体（intentional community)」を作っていたという」(同書，62-63 ページ）

最初の引用で，海賊船に逃亡奴隷が乗っていたことが示されている点は興味深い。逃亡奴隷というのは，筆者の考えでは植民地（制度）を拒否する最初の存在で，奴隷制度が成立すると同時に誕生したはずだからだ。

二つめの引用は，実際にあったといわれる「リバタリア」という海賊によるユートピア共同体の説明だが，ここは網野善彦が『無縁・公界・楽――日本中世の自由と平和』で論じた「無縁」や「アジール」と通じ合う。

17 世紀から 18 世紀，新大陸に植民地制度が強固に立ち上がり，またあらゆるところにその網の目が張り巡らされようとしているとき，その制度についていくことができずに逃亡した人たち，過去を捨てた人たちが，「自由」という旗のもと，陸ではなく海に避難所（アジール）を求

めたのは当然のことかもしれない。植民地空間というのはまず陸地の占有と支配によって成り立つからだ。陸地が植民地になったのと同時に，海が脱植民地的な空間となったのだ。

ただ，陸地にもこのような「アジール」はあっただろう。

海賊船のように多民族で多言語でクレオール言語も生まれるような空間となると，逃亡奴隷の集落，例えばサン・バシリオ・デ・パレンケ（San Basilio de Palenque）や，バランキーリャ（Barranquilla）という都市が思い出される（どちらもコロンビア）。

前者は逃亡奴隷のリーダーに率いられた奴隷たちがカリブ海から内陸に入って打ち立てたアフロ系の集落で，農業や略奪などによって生計を立て，その後自由都市として広く認知されるようになる。ここではスペイン語をベースにしたクレオール言語が話されている。後者は植民地制度から脱落した民（解放奴隷なども含まれる）が，カリブ海に注ぐ川沿いにいつの間にか定住して出来上がった主人なき自治共同体である。交易によって成り立ったこの町は貨幣経済によって人と人がつながった。

どちらも植民地制度の狭間に歴史と偶然の産物として誕生した「非植民地」である。小笠原さんも依拠しているマーカス・レディカーの「自由のリバタリア――海賊のユートピア」（デイヴィッド･ゴーディングリ編『図説海賊大全』）を読んでみると，陸のユートピアのようなアジールは新大陸のあちこちにあったのではないかと想像したくなる[2)]。

逃亡奴隷と海賊

ラテンアメリカ研究の立場から海賊を考えてみるとどうか。

スペイン領のラテンアメリカの人々にとって海賊というのは襲撃してくる加害者である。例えばコロンビアのカリブ海沿岸のカルタヘナやリオアチャの歴史や物語に少しでも触れれば，たちまち海賊襲撃の歴史に出会うことになる。

> 「十六世紀に海賊のフランシス・ドレイクがリオアチャを襲ったとき，ウルスラ・イグアランの曾祖母は警鐘と砲声に驚いて腰を抜かし，火のおこっているかまどに座りこんでしまった。」（ガルシア・マルケス『百年の孤独』）。

> 「ドレイクは船団をひきいてカルタヘナの広大な外港にまっすぐ入っていき，（中略）カーライルに指揮させて六〇〇人の男たちを上陸させた。（中略）つぎの朝，カーライルの縦隊はあぶなっかしい防御線を簡単に突破し，おびえるスペイン軍をさらに恐怖におとしいれた。［スペイン側の］ビケのガレー船二隻は浅瀬に乗りあげてしまった。パニックにおちいった乗組員たちは船を捨て，波をはねかして岸に逃げていき，船上では奴隷たちが反乱に立ち上がった。」（デイヴィッド・コーディングリ『図説海賊大全』）

後者の引用では，海賊との対決に乗じてスペイン側の奴隷が蜂起している。先に引用したように，海賊船には逃亡奴隷が乗っていた。となると，逃亡奴隷が海賊になったのは，当の海賊の襲撃によって生じた混乱に乗じたものだったのかもしれない。少なくともそれは一つのチャ

ンスだっただろう。ハバナでは16世紀前半に黒人奴隷がフランスの海賊と手を結んで反乱を起こしているが，このような経緯で海賊に転じた奴隷もいたに違いない[3)]。

植民地は階級や人種によって縦社会の構造を作ったが，海賊の襲撃によって硬直した制度に風穴のあく祝祭空間ができあがる。もっとも，逃亡奴隷の転身について考えてみると，元はサトウキビ労働をやらされていた逃亡奴隷が技術も必要で役割分担もある船乗りに簡単になれたのだろうか。航海術をそうそう身につけられるとも思えないのだがどうなのだろう。

何れにしても，海賊による陸地の襲撃は，その先に何が起こるかわからない交渉の場としての接触領域になっている。ガルシア・マルケスの『百年の孤独』の引用に戻ってみれば，やはりここでも海賊との接触が，一族の歴史に偶然を生んだ原因として書き出されている[4)]。

筆者の関心は，海賊になった逃亡奴隷がいるのかということだが，ハバナ出身（つまり現在のキューバ）の海賊がいたことはわかっている。資料によれば，16世紀の終わりにそのドレイクと行動した人物である。

ここで参考にしている資料はキューバで出版された本で，その名も『カリブの海賊』という（図1）。

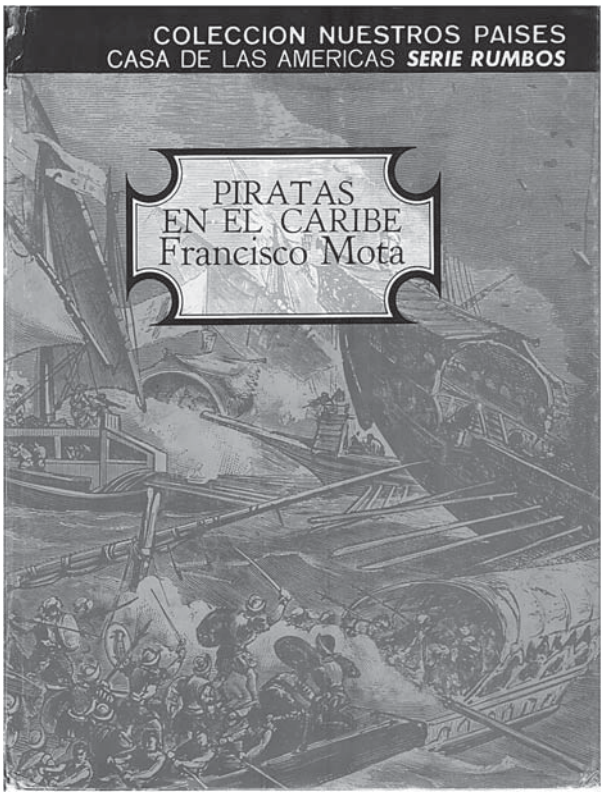

図1：Francisco Mota, *Piratas en el Caribe*, Casa de las Américas, La Habana, 1984.

このハバナ出身の海賊はディエゴ・グリーリョ（Diego Grillo）といい，1555年から1557年の間にハバナに生まれた。父親はスペイン人，母親は黒人奴隷だった。つまりはムラートで，「混

血ディエゴ」とも呼ばれる。幼少期をハバナで送り，12歳か13歳の時，ハバナに入港していたスペイン船に乗り込む。その後，1572年，ピノス島（キューバ島の南部にある島。青年の島とも呼ばれる）にあった逃亡奴隷の集落にいたが，ドレイクに捕らえられ，その後ドレイクやホーキンスの右腕となる。時系列で見れば，ドレイクがコロンビア沿岸を襲うのは混血ディエゴを伴ってのことだ。

混血ディエゴは，ハバナから飛び出したのち，スペイン船から逃亡奴隷の集落，そしてイギリス船へと流れ着いていく。ムラートというクリオーリョ（新大陸生まれの白人）でなかったことが植民地社会で排除に働き，海に出たのかもしれない。

ラテンアメリカの海賊小説

このような海賊にラテンアメリカの作家が目をつけないはずがなく，小説になっている[5)]。その一つが『海賊（*El filibustero*）』[6)]である。

混血ディエゴはメキシコのユカタン半島のカンペチェを襲撃する海賊になっている。以前にも襲撃してこの町を恐怖に陥れていた海賊は再び町を襲い，乗り込む。すると彼は，気絶していた良家の美しい娘コンチータを見つけ，その娘の父を前回の襲撃で殺していたことを知りつつも，一目惚れの恋に落ちる。娘の方も，気絶していたために父を殺した海賊とは気づかずに外見の美しい彼に恋をする。

その後，コンチータの母は娘を別の男フェルナンドと結婚させようとするが，コンチータはディエゴのことが忘れられない。フェルナンドはコンチータに片思いの男がいることに気づく。ディエゴは，3度目の襲撃をすることになるが，同時にコンチータを救うことも自らに誓い，町が火の海になるとコンチータを連れ出す。しかしその場にフェルナンドが現れ，ディエゴがコンチータの恋の相手だと悟る。

ディエゴは秘密を知ったフェルナンドを殺し，コンチータをさらって海に逃げる。2人をカンペチェの軍隊が追い，ディエゴからコンチータを取り戻そうとするが，コンチータは自分の町の軍人が，自分を救ってくれた男と戦う理由がわからない。死ぬのなら，自分を助けてくれたこの男と死にたいと叫ぶ。

するとカンペチェの軍隊はコンチータに言う。あなたは海賊の混血ディエゴと死にたいのか？と。ここでコンチータはようやく，そして初めて，自分を救ってくれたこの男が，父を殺し，フェルナンドを殺し，町を火の海にした海賊ディエゴであることに気づく。船上のディエゴは逃げられないことを悟り海に飛び込む。冷酷無比な海賊に恋をしていたことを知らされたコンチータは気が狂い，残りの人生を精神病院で送る。

以上が小説のあらましである。スティーヴンソンの『宝島』とは違い，宝のありかを示す謎めいた地図も出てこなければ，海を進む冒険が描かれるわけでもない。ここで語られるのは，敵方の娘との恋に落ちる男，そして父を殺した男にそうとは知らずに恋に落ちる女。その2人の叶わぬ恋。できすぎた偶然（ディエゴの父であるヨーロッパ系白人がカンペチェに住んでいて父子は再会する）などなどである。

ギリシャ悲劇的な運命とロマン主義的な純愛の混じり合ったこの小説は，19世紀半ば，『宝島』

よりも前に書かれている。作者はフスト・シエラ・オレイリー（Justo Sierra O'Reilly, 1814-1861）といい，小説の舞台となったカンペチェを中心に活動した作家である。

発表された 1841 年は実は「ユカタン共和国」独立の翌年にあたる[7)]。したがってこの小説はカンペチェに伝わる海賊伝説をモチーフに，「ユカタン人」や「カンペチェ魂」を描き出そうとした一種のナショナリズム・プロパガンダ小説である。かつては海賊に抗したカンペチェの人々の伝統を掘り起こし，新興国家の国民文学となるようなもくろみをもって書かれている[8)]。それにしても，海洋冒険小説が欧米で生み出される前，ラテンアメリカでこのような「海賊小説」が書かれていたことは，世界の文学の多様さを示しているのではないだろうか。

海賊，奴隷，ムラート

ディエゴの履歴はこの小説では説明されていないので，作者が元奴隷と考えていたかどうかはわからない。ただ，ムラートの海賊がクリオーリョ娘に恋をする設定は，白人征服者と先住民被植民者との出会い（例えばコルテスとマリンチェ）とは異なる，主にカリブ海地域で起き得た新しい出会いの形である。そこがはっきりと示されているところが注目に値する。

このような出会いを描いた別のカリブ小説として，この『海賊』と同時代，しかも同じ年に発表された『サブ（*Sab*）』（作者はキューバのヘルトゥルーディス・ゴメス・デ・アベジャネーダ）が思い出される。

『サブ』ではサトウキビ大農場を舞台に，ムラートの元奴隷（サブ）が農場主のクリオーリョ娘に恋をする。もちろん叶わぬ恋である。クリオーリョ娘にはやはりクリオーリョの許婚がいて，失意のムラートは自害する。ムラートは，クリオーリョとの間にある階級差は乗り越えられないのだ。

わずか 2 冊とはいえ，まったく同時代のラテンアメリカ小説で奴隷と海賊が「ムラート」というアイデンティティを引き受けさせられ，またそのことが植民地社会における階級の限界を示しているのは興味深い。

おそらく彼らのようなムラートにとって，階級を超越して生きられる場所は植民地空間にはほとんどなかったのだろう。サブのいたサトウキビ農場にしろ，ディエゴの生まれたハバナという植民都市にしろ，階級の階段をのぼることはできなかった。『海賊』のなかでディエゴは白人の父に対して，自分の人種的葛藤を告白している。

サブは船に乗る機会はなかったが，ディエゴは海に出た。階級を無化し，自由に人とのつながりを可能にするのが海賊船だったからだろう。しかしそのディエゴに待っていたのもサブと同じ運命だった。彼もまたクリオーリョ娘に恋をして失敗に終わる。

そのムラートを国民統合のモチーフとしたのは，のちの 20 世紀のキューバ詩人ニコラス・ギジェンである。彼は「キューバはすでに分かっている，自分がムラートであることを」と歌った[9)]。ムラートに居場所を与えるための植民地解放までにはまだ時間がかかるわけだが，それまでは海に飛び出すムラートが多かったに違いない。かりにその先に何が待っていようとも。

注

1）筆者は，2017年10月6日，連続講座「越境する民―接触／排除」の第1回「パイレーツ・モダニティ――海賊，奴隷，資本主義」における小笠原博毅氏のコメンテーターをつとめた。本稿は，小笠原氏の報告を受けてコメントした内容を，講座の趣旨を踏まえて大幅に書き改めたものである。

2）『図説海賊大全』の監修・翻訳者でラテンアメリカ研究者の増田義郎（1928-2016）は「訳者ノート」で，レディカーによる海賊ユートピア論に関心を持ったと言っている。デイヴィッド・コーディングリ『図説海賊大全』（増田義郎監修，増田義郎，竹内和世訳），東洋書林，2000年。

3）エリック・ウィリアムズ『コロンブスからカストロまで1』（川北稔訳），岩波現代選書，1978年，72ページ。

4）参考までに，『百年の孤独』では登場人物の1人が村を出たのち，「国籍不明の水夫仲間に身を投じて，六十五回も世界を回」り，「船乗り仲間の隠語をまじえたスペイン語」を話すようになる。この男の村への帰還もまた，村の新たな文化との接触領域を作り出している。

5）この後紹介する『海賊』の他に，キューバの作家もこの海賊を題材に歴史小説を書いている。Fernando Velásquez Medina, *El mar de los caníbales*, 2012.

6）Justo Sierra O'Reilly, *El filibustero*, UNAM, México, D.F., 2003.

7）ユカタン共和国については，メソアメリカ史研究者の郷澤圭介氏にご教示いただいた。

8）小説の読解には，Nina Gerasi-Navarro, *Pirate Novels*, Duke University Press, Durham and London, 1999. を参考にした。

9）Nicolás Guillén, "Palabras en el trópico", *Obra poética*（*1922-58*）, Letras Cubanas, La Habana, 1985, p.122.